

第5回中小研セミナー（2016年8月6日）

鉄腕アトムを救った大阪の中小企業経営者

－手塚治虫『どついたれ』の真実を明かす－

産経新聞大阪本社 前編集委員

大阪経済大学 客員教授 巽 尚 之

ただいま、太田先生から御紹介に預かりました、産経新聞の巽尚之と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今、太田先生から御紹介いただきましたが、太田先生とのつながりは、10年ほど前に、私、産経新聞社で産学連携のフォーラムを企画しまして、そのフォーラムに産学の「学」の代表として太田先生に来ていただいた。それ以来、大変御協力をしていただきました。産学連携のフォーラムというのは10年間続けまして、ことしはそれを衣がえし、ことし11月に、リクルートキャリアさん、大阪商工会議所さんと産経新聞の3者で“就活”をテーマにしたフォーラムを実施すべく、今、準備を進めているところでございます。

それでは、本日のお話のテーマであります「鉄腕アトムを救った大阪の中小企業経営者」について、お話をさせていただきたいと思います。

そもそも私が手塚治虫さんの作品と出会ったのは、私は1999年から2001年の2年間、東京経済部におりまして経済産業省を2年間担当していた頃です。経産省を担当すると、経済産業省の本館の10階に記者クラブがありまして、本社には行かずに、2年間ずっと霞ヶ関に通っていました。経産省というのは非常に守備範囲が広うございまして、産業政策はもちろんですが、特許問題、それからエネルギー、中小企業、いろんな分野を抱えている、そういう省庁です。

あるとき中小企業の記事を書こうと思いました。ベンチャーについて記事を書こうと。ただ単に記事を書くのではなくて、冒頭に、キャッチーなお話を持ってこようと考え、ひょっとして手塚治虫さんは何かベンチャーに関する話を描かれ

てなかったかなとふと思いました。それで、手塚プロダクションに電話をし、電話に出られた方に、手塚治虫さんはベンチャーに関する作品、そういう漫画をお描きになってませんかとお尋ねをしたところ、電話に出られた方が、ベンチャーそのものじゃないけれど、多少そういう要素のある作品に「どついたれ」があると聞きました。聞いたことなかった作品でした。早速、新宿の紀伊國屋に行きまして、「どついたれ」という作品を買ってきて読みました。すると、非常におもしろいんです。

作品の巻頭に、この物語は葛西健蔵、津田友一、廣瀬昭夫がモデルになっていると手塚さん自身が書かれていらっしゃいます。戦後の焼け跡の中から大阪が立ち上がっていく、そういう舞台、時代背景を描いていらっしゃって、手塚治虫自身も学生帽をかぶって焼け野原をほつき歩いていく、そんなシーンも出てきます。最初は、梅田の阪急百貨店が空襲で焼け落ちる、そういうところから始まっていく作品です。未来とか科学をお描きになる手塚さんのイメージからすると、こんな作品も描いてるんだと思って、非常に異色の作品だという印象を持ちました。

子供のころは確かに「鉄腕アトム」とか「ジャングル大帝」とか、そういう作品を読んだり、テレビで見たりして、手塚作品に対する親しみはあったんですが、それとは違う手塚さんの一面、それに初めて出会いました、「どついたれ」を通じて。

これをきっかけに、今申しましたように手塚作品を、いろんな作品を読んでみようと思いました。いわゆる手塚さんの代表作だけではなくて知られてない作品です。大阪のグランドビルの30階に、昨年なくなりましたが紀伊國屋書店のコミック館がありました。漫画ばかり扱ってる書店ですが、そこに手塚治虫コーナーがありました。手塚さんの作品が集められていて、その前に立つと、本当に聞いたこともないような作品がいっぱい並んでいるんです。それを片っ端からいろいろ読みあさって、今でも全部を読めてはいませんが、（後でまた少し触れようと思いますが）手塚作品に感動したというのが、改めての手塚さんとの出会いでした。

2001年まで東京経済部にいまして、そこから大阪に戻りました。大阪経済部で次長をやりながら財界も担当しておりました。そのときに、お配りした「志を秘めて」というタイトルの連載、これを私は当時の経済部長に、連載をしませんか

ということを提案しました。その提案が通って、「志を秘めて」というタイトルの連載を1年間、私が書きました。コンセプトは経済人あるいは経営者、あるいは経済人とか経営者にまつわる関係者、そういった人の隠れたエピソード、それを紹介していくことを主題にしまして、朝刊で1年間連載を続けました。ネタを見つけるのに結構いろいろ苦労はしたんですが、1つには「どついたれ」を読んでいたんで、葛西さんのところに行けば、きっとおもしろい話が聞けるに違いないということを確認していました。幾つかのネタを執筆し、じゃあぼちぼち話を聞きに行こうと思い、葛西さんのところにお伺いをしました。

葛西健蔵さんは、アプリカ葛西というベビーカーの会社の創業者でいらっしゃって、今、この会社はアプリカ・チルドレンズプロダクツという合同会社になっています。従業員数は今270人。私は葛西さんのところに参りまして、「どついたれ」のモデルになってる人という認識しかなかったんですが、いろいろ話を聞きました。それが私の新聞記者生活としましては、多分、今までに出会った中で最大級のエピソードであると思いました。

葛西さんは、大正15年のお生まれです。摂南高等工業学校、今の大阪工業大学の御出身でいらっしゃって、在学中に、戦時中ですので学徒動員がありました。軍需工場で働かれました。たしか三菱重工だったかな、ヘリコプターをつくる、そういうところだったと記憶をしております。その中で、1人、学生で悪いやつがいて、軍需工場ですから金属をいろいろ扱うんですが、それを抽出して、ベルトのバックルにして売りさばくという不屈きな生徒がいたと。その生徒が警察に摘発されて、警察に留め置かれた。本来は、高等学校の先生が警察に行って、彼の釈放を願い出るところですが、葛西さんはそのとき、生徒総代をやっておられた。学校から、おまえが代わりに行ってこいと言われて、警察に行って、この生徒を釈放してほしいということを警察に願い出て、彼は無事に釈放されるということを経験されました。

それをきっかけにしまして、葛西さんは悪いことをした人、犯罪者とか非行少年、そういう人たちを更生させることに、ライフワークとして取り組まれるようになります。警察とか刑務所とかに行かれたり、刑法学者で有名な佐伯千仞先生に弁護士をお願いして、犯罪者を救出するなど、そういった活動を独自になさるんです。

戦後の間もないころというのは、やくざ者の抗争とか、いざこざが大阪の中で

もあちらこちらで起きていたことです。八尾とか河内で、やくざ者の抗争事件が頻発しました。血の気の多い若い衆がそういう事件を起こしたんです。あるとき、三輪車をトラックで葛西さんの会社に納入するんですが、そのトラックの荷台の陰に隠れて、2人の若者が葛西さんを訪ねてきて葛西さんに助けてくださいと頼むんです。どうしたんだと聞くと、自分たちは対立するやくざといいますか、そういった奴だと思って、相手をぼこぼこに殴って、のつぼに沈めたと。そうすると、そいつの背広の内ポケットから警察手帳が出てきてこれは大変なことをしでかしたとコトの重大さに気付き、葛西さんのところに來られて、助けてほしいとお願いされたんです。葛西さんはその話を聞いて、警察に電話をして、そこは穩便に事を収めます。それで、2人に対し、君たちは正業について、ちゃんと仕事をしなきゃいけないよということを諭すんです。それがさっき巻頭に書かれていた津田友一と廣瀬昭夫という、この2人でした。

津田さんと廣瀬さんは、葛西さんの話を聞いて、廣瀬さんのほうは葛西さんのところに納める三輪車をつくる会社に就職をします。そこから後に、何年かたって、経営権を持って、小さな会社の経営者になられます。もう一人の津田さん、この人はもう根っからのやくざ者と言われていて、あるときばくちをしてばくちのカタにダンプカーを手に入れた。それを元手に土建業に乗り出します。津田建設という会社、公共事業を受注する会社を興されて、2人とも小さな会社の経営者になりました。

手塚さんの話に移りますが、手塚治虫さんは、昔、虫プロダクションという会社を経営されていました。アニメーションを製作する会社ですが、ちょうどアニメーションの勃興期といいますか、創世記といいますか、そのころです。テレビでアニメーションが多く放映されるようになったところに、手塚作品もたくさんアニメ化されました。それで、手塚さんの虫プロダクションはアニメ制作を事業としてやってらっしゃったんですが、昭和48年に虫プロダクションが倒産します。負債額4億円です。

なぜ倒産したかという、アニメーションですから、クリエイターがアニメをつくります。8割、9割ぐらいできて、「先生、これでいいでしょうか」と手塚さんのところに持ってこられる。そうすると、手塚さんは、「これじゃだめだ、もう一回つくり直せ」と命じる。それによって数千万円がパーになってしまうんです。

手塚さんはそういう完全主義者でいらっしゃったので、数千万円が積み積み積もって、経営が行き詰まり、とうとう虫プロダクションが倒産をしてしまいます。

手塚さんは全国を債権者に追われて、逃げ回ります。葛西さんはなぜ手塚さんと親交があったかという、アトムの商標をかつて使ったことがあった。それが御縁で手塚さんと葛西さんは親交がおありだったんですが、昭和48年に虫プロダクションが倒産して、手塚さんは全国を逃げ回る中で、大阪にやってきて、心斎橋にあったアップリカの門をたたいて、「葛西さん、助けてほしい」とお願いされるんです。

葛西さんは手塚さんのお話を聞いて、そのとき手塚作品の著作権の数は600ぐらいありました。それを債権者が勝手に持っていくと、後でもう収拾がつかなくなるということが一番恐れたんです。そこで葛西さんは、手塚さんの著作権を全部、自分の名義に書き換えます。そして債権者の矢面に立って、手塚さんを守るんです。そのために葛西さんは東京に行ったり、大阪に行ったり、東奔西走されたんですが、ややこしい債権者も結構、多かったのですね。例えば車の中に、身の危険を感じるので竹刀を忍び込ませておく、それで債権者に会うというようなエピソードも伺いました。こうして何とか手塚さんの持っていた著作権は葛西さんによって守られることになります。

その様子を、さっき申しました津田さんと廣瀬さんという方が、小さな会社の経営者になっておられたんですが、「自分たちが恩人と仰ぐ葛西さんが、手塚先生のために東奔西走している、ここは俺たちも一肌脱ごう」と考えて、2人でいろんなところからお金をかき集めてくる。借金ですが、それで5,000万円をかき集めてきます。昭和48年の5,000万円だから、今で言うとは億円になりますね。それを葛西さんのところに持ってこられて、このお金を手塚先生に提供してほしいと申し出るんです。

葛西さんは2人の話を聞いて、手塚治虫さんに、この2人が5,000万円を手塚先生に提供したいと言っているということを伝えます。すると、手塚さんは、「そんな見ず知らずの人から5,000万円の大金を受け取ることはできない」と申し出を辞退されます。しかし、自分が虫プロダクションの倒産で、債権者に追われる、そういう惨めな境遇になってしまったら、今まで親しくしていた人、信用していた人たちも、みんな自分から離れていってしまう。そんな中で、見ず知らずの、大

阪の小さな会社の経営者が、葛西さんの友人が、自分のために5,000万円もの大金を提供しようと言ってくれている。そこまで自分のことを評価してくれる人がいるんだったら、もう一度、絵筆をとって、創作活動を始めようと思われるんです。そこから手塚さんの後期の作品が生まれていくことになるわけです。それが昭和48年です。こうして手塚さんが再起をされて、創作活動を始めながら、借金も御自身で少しずつ返済をしていかれる。

それから6年たって、昭和54年に集英社が「ヤングジャンプ」を創刊することになります。「少年ジャンプ」というのはこれまでもあったんですが、ミドルティーンぐらいを対象にした漫画雑誌の「少年ジャンプ」に対し、もう少し世代の高い、ハイティーンぐらいの読者層を対象にした新しい漫画雑誌をつくろうということで、集英社が「ヤングジャンプ」の創刊の企画をします。それで、手塚先生に、戦後の経済史のようなものを描いてくれませんかということを要請されます。

手塚さんはその話を聞いて、「自分を助けてくれた葛西さんのことはよく知ってる、しかし自分に5,000万円もの大金を提供しようと言ってくれた津田、廣瀬、その人たちはどんな人たちだろう」と、ふと疑問に思われるんです。ぜひ話を聞きたいと、東京から集英社の、この間、退職されましたが、当時の編集者であった大門千春さんと同行されて、葛西さんのところに訪ねて来られるんです。葛西さんは、生駒山のふもとに自分の生家がおありだったんですが、そこをゲストハウスみたいに使われていて、そこに津田さんと廣瀬さんと呼び、手塚さんを迎えられます。すき焼きをつつきながら、手塚さんは、あなた方は戦後の混乱期をどうやって生き抜いてきたのか、それから、警察に追われるようになったのはどういういきさつがあったのかということを取材されて、それをもとに1年間、「ヤングジャンプ」に連載されたのが「どついたれ」という作品だったんです。

私は、手もとにお配りしました「志を秘めて」の中で、普通、連載というのは、大体1回で終わるんですが、この話は非常に中身の濃い話だと判断しましたので、上下2回に分けて紹介をしました。さらにこの話は非常におもしろい話なので、新聞だけにとどめておくのはもったいないと思ひまして、知り合いの出版編集者に、「本にならないですか」と相談したら、「版元を探しましょう」ということをおっしゃっていただいて、初めて、私の第1冊目の作品として書かせてもらったのが、「鉄腕アトムを救った男」という書です。実業之日本社から出させていた

だきました。

新聞に戻りますが、「志を秘めて」という連載は、経済人とか経営者、あるいはそれに関連する人たちの隠れたエピソードを紹介することをコンセプトとして1年間連載したということは、さっきお伝えしましたが、記事のスタイルとしまして、私が書く本文に関連する著名人のコメントをくっつけるという構成にしていたんです。しかしこの「どついたれ」なんて、多分、誰に聞いても知らないだろうなと思い、一体誰のコメントをつけようかなと悩んでいました。あるとき、これとは別の教育に関するコメントをもらうためにラサール石井氏のアポイントをとっていたんです。

ラサール石井君は、実は私とは、大阪市立住吉小学校、住吉中学校で、同期です。彼は、住吉小学校では児童会の会長をやったりして、非常に活発で目立つ生徒ではあったんですが、石井君は、御存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、入江塾というスパルタ塾、缶詰で勉強させるという、その塾に、小学校の高学年ぐらいから通うようになりました。猛勉強の末に彼は、灘高を受けて、落ちます。そしてその足で、次はラサールを受けに行くんです。鹿児島ラサールに受かり、高校から彼はラサールに行ったんです。

そういうこともあったので、彼に教育論、教育についてのコメントを彼からもらおうと思いまして、会いました。所期の目的である教育についてのお話を彼から聞きまして、「どついたれ」は、多分知らないと思っていたんですが、彼に、「ところでおまえ、手塚治虫さんの『どついたれ』という作品知ってるか」と聞いてみたんです。そしたら、彼は意外にも知っていたのです。「手塚作品は、自分はほとんど全部読んでいる」と。その中で「どついたれ」は大阪を舞台にした異色の作品だし、「もし機会があったら映画にしたいんだ」ということを自分から言い出したんです。「だったら、そっちのコメントをもらっていいか」と聞きまして、「全然構わないよ」ということだったので、この2枚目、連載の下のところに、“作品を映画にしたい”という彼のコメントをくっつけたんです。

ここから事後談になりますが、当時、私は財界を担当していました。財界の主要企業のスタッフの皆さん方に、「どついたれ」を解説し実は大阪にはこんな話があるんだよということを言いふらしたんです。そうすると、その中で、サントリーのスタッフをやっていた方が一番関心を持ってくださって、「異さん、

この話おもしろい」と。「これ、大阪の財界で応援しようよ、映画化も何とかバックアップしよう」とおっしゃっていただいて、その後、石井君が大阪に来たときに食事会という形にして、財界のスタッフの方々に集まっていたいて、帝国ホテルのレストランで石井君の思いを伝える、映画にしたいんだということを彼から語ってもらう、そういう小さな夕食会をセッティングしました。それで、この作品を何とか映画にできないかという構想が動き出しました。

石井君が紹介してくれた神田裕司さんという映画プロデューサーが「相談に乗りましょう」と大阪に来られて、大体どれぐらいかかるんだろうというお話から始まったんです。当時は、これを映画にするのに、戦後の焼け跡とかを再現すると、「多分10億円ぐらいかかりますよ」となったんです。10億円じゃ、これは幾ら何でも難しいよねということになって、そこからなかなか進まなかったんです。

その後、大阪府の商工労働部長に、経済産業省を退官された杉本安史さんという方が就任された、橋下府政のときです。杉本さんに、私が、御挨拶にお伺いしたときに、実はこんな話があるんです、「どついたれ」というのは実は大阪を舞台にしてるんですよということをお話をする、と、彼が、「それは巽さん、おもしろいですね」と話に乗ってこられました。大阪府としても産業育成、中小企業育成、ベンチャーを育てる、そういう観点から、これを映画にするというのは非常に意義があると賛同してくれました。だから何らかの名目で、多分、自分の権限で「3,000万円ぐらいは出せると思います」とおっしゃってくださったんです。それで、じゃあもう一回、映画化の話を考えましょうかという話になります。塩屋俊さんという映画監督の方がいらっしゃいました。彼が、そういう話があるんだったら、自分がプロデューサーをしましょうと企画書をつくっていただいて、キャスティングなども、企画書の中に盛り込んでくださったんです。たしか、主人公ではないですけど、豊川悦司とか、そういう人たちを使おうという企画でした。

じゃあこれで何とか映画化できるかもしれないということになって、大手企業の方も紹介していただいて、御相談に行ったこともありました。子供服メーカー、ミキハウスの木村皓一社長は、これは八尾とかが舞台になってる作品であるから、「八尾に本社を置くミキハウスとしては、自分のポケットマネーで1,000万円までは出してあげるよ」と協力を申し出てくださいました。あとはいろんなところに声をかけて、お金を集めて、映画つくればいいということを今でもおっしゃってい

ただいています。何とか映画化が進みかけたんですが、残念ながら、さっき申しました塩屋俊さんという方は2年前に亡くなりました。56歳だったんですが、大動脈瘤破裂で急死されました。商工労働部長でいらっしゃった杉本さんも、橋下さんが知事を退任されたとともに東京にお帰りになってしまって、映画化の話はもう一度振り出しに戻ってしまいました。

私の、第1冊目の本が「鉄腕アトムを救った男」というタイトルの本であると申し上げましたが、私はタレントの浜村淳さんとも、親しくさせていただいており、浜村さんの「ありがとう浜村淳です」というラジオの番組でこの本を書いたころに、「その本の内容についてお話をしてくださいよ」と呼んでくださった。そういうことで、「どついたれ」という作品について、新聞や本だけでなくラジオの電波を通じて多少とも皆さんに知っていただく機会があったのかなと思っています。

それがきっかけだと思いますが、毎日放送で当時、番組を担当していらっしゃった島修一さんというプロデューサーの方が、昨年「どついたれ」を、毎日放送のラジオドラマにされたんです。ですから、映画化よりも先にラジオドラマになったんですが、引き続き何とか映画化を実現させたいと願っています。今はCGの技術が発達しているので、10億円もかからないです。でも松竹京都撮影所の北川淳一社長に相談すると、約3億円だそうです、総額。3億円あれば映画化できるでしょうということになっています。

では、手塚さんの作品について、どれだけ手塚作品というのはすごいのかということ、私が認識した範囲でお伝えしようと思います。その前に、「どついたれ」がどういうストーリーかということをお話しします。

「どついたれ」は、第1部と第2部に分かれています。第1部は、廣瀬と津田という両人が、戦後の混乱期をどたばたに生き抜いていくというか、非常にコミカルに描かれています。例えば、終戦のころやみ市がありました。当時の主婦がリュックサックを担いで、やみ市でいろんなものを買ってきます。食材ですね、家で待ってる子供たちとか、御主人のために、きょうの晩御飯をつくろうと思って、やみ市で食材を買ってくる。あるとき電車がとめられて、官憲が電車の中に乗り込んできて、それを全部供出しろと言うんです。せっかくやみ市で手に入れた食材が全部そこで供出させられるというのは非常につらいなと思いながら、女性たちは言われるままにするんですが、たまたまその電車に乗り合わせていたのが津田と

廣瀬という設定になっています。ここは俺たちが助けようと、電車の中で2人して着ている服を全部脱ぎ捨て、全裸になって電車を飛びおり、走り出して逃げる。すると警察はそっちのほうを追いかけるから、女性たちは助かるという場面が描かれています。これが当時の国鉄の八尾駅です。そういうふうには戦後の混乱期のどたばたを大変コミカルに描いているのが第1部です。

第2部は少しシリアスなトーンに変わります。哲という少年が主人公です。この主人公の哲は戦災孤児です。あばら家に住んでいるんですが、近所の子供たちを取り仕切っている親分格です。13歳の妹と2人で住んでいる。この哲が、あるとき妹から進駐軍に身を売ると言うことを聞かされます。彼は妹をひっぱたいて、しかりつけます、おまえはどうしてそんな汚い、はしたないことを言うんだということを言っ、叱るんですが、妹はお兄ちゃんに、「だってこうでもしていけないと私たち生きていけないじゃない」ということを言っ、彼には返す言葉がありません。哲は、自分たちをそういう惨めな境遇に追いやったのはアメリカ軍だ、進駐軍だ、アメリカが憎いと、アメリカに対する憎しみを募らせていって、マッカーサーを殺そうと決意するんです。やくざから拳銃を手に入れて、東京に行っ、マッカーサーを殺そうとするんですが、温情派のやくざの親分さんから、君はそんなことをしても何もならないと、憎しみの連鎖を生むだけだということを諭されて、彼が目が覚めるというところで終わっています。未完なんです。

どうして「どついたら」が未完になったのかというと、手塚さんは大変負けず嫌いの性格でして、ヤングジャンプに連載されたんですが、「どついたら」はどちらかというと地味な作品で、余り脚光を浴びなかった。それよりも本宮ひろ志の「俺の空」とか劇画系の作品が注目されたんです。集英社としては、手塚さんに、「別にそんな脚光を浴びるような作品でなくても構いません。この作品をずっと続けてください」と要請されたんですが、手塚さんは、「そんなに注目されないんだったらもうやめよう」と、第2部で終わっています。非常に残念です。

手塚プロダクションの松谷孝征社長に伺いますと、将来第1部、第2部、第3部、4部、5部というふうに、ずっといろんな登場人物が変わっていって、最後にはこれが全部つながるというそんな構想をされていたそうです。

「どついたら」の中で、葛西さんはベンチャー企業家のモデルとして登場されます。作品の中では葛城という登場人物になっています。戦後のどたばたの中から、

金属を集めてきて、ベルトのバックルを販売する事業を始める設定になっています。心斎橋に布団の「西川」があります。西川のビルの間に、板を渡して、その上にオフィスをつくるという実に漫画みたいな話なんですが、(漫画ですけど、)これは実話だそうです。そういうふうに「どついたれ」は大阪のたくましく生きていく姿、それを活写した作品であります。さっき大阪府商工労働部長の杉本さんが評価されたと申しましたが、やっぱりそういうところ、起業精神というか、旺盛な意欲、ガッツ、負けん気…そういうDNAを大阪の人たちに、大阪だけでなく日本中の人たちに伝えるという意味では、映画化は意義があると理解をしてくださったんです。

では、手塚さんの作品につきまして、ほかにどんな作品があるのか御紹介すると、本当にたくさんあるんですが、例えば「グリング」は御存じでしょうか。これも大変ユニークな作品で、私の好きな作品の1つです。商社マンが主人公です。南米のある国、途上国に赴任をする商社マンで、日本人と書いて「ひととひとし」と読ませていますが、この人が主人公です。日本氏は、日本人のアイデンティティーを象徴する人物として描かれています。というのは、もともと相撲取りだったという設定になっています。相撲取りだったんですが、あるとき大手商社の専務に、「おまえ、うちの会社に来ないか」と声をかけられて、その会社に入る。それで、ある南米の国に赴任をするというところから物語は始まります。

その国に赴任をすると、自分の部下がいるんですが、ほどなくその部下に裏切られます。東京の本社では自分を買ってくれていた専務が失脚します。そのために彼は、赴任した南米の国よりももっと途上国のある南米国に左遷をさせられます。もちろん支社長として左遷をされるんですが、白人のフランス人の奥さんと、5歳ぐらいの娘の3人家族という設定になっています。もっとひどい国に赴任をすると、そこは多分コロンビアじゃないかなと思いますが、政府軍と反政府軍ゲリラとの間で銃撃戦が交わされ内戦が起きてる、そういう国です。そこに赴任をして、あるとき家族で食事に行きます。レストランに入ります。案内された席は厨房の脇の非常によくない席です。彼は「もっといい席に変えてくれ」とレストランの店員に言うんですが、「いや全部予約で埋まってます」と言われます。しかし、フランス人の奥さんが「席を変えてくれませんか」と言うと、こちらへどうぞと、一番いい席に案内してくれるんです。彼は非常に不快になります。これは人種差

別です。人種差別の1つのあらわれとして、作品の中に問題提起されているんです。

それから、「陽だまりの樹」を御存じの方はいらっしゃいますか。手塚さんのひいおじいさんが江戸時代、江戸で種痘所をつくろうとする。手塚さんのひいおじいさんは手塚良庵という人ですが、その人は西洋医学なんです。当時、幕末は、西洋医学は異端視され東洋医学が主流でした。種痘所、ジェンナーの種痘、それを江戸につくろうとすると大変、迫害をされ、若いころ彼は大阪にやって来て、適塾に学ぶ。これは実話です。福沢諭吉らと机を並べて、緒方洪庵から教えを受けるといいますが、そこに伊武谷という武士が登場します。伊武谷は架空の人物ですが、手塚さんの御先祖の手塚良庵と、伊武谷という武士との青年物語で8巻の大作です。最後の巻なんかは本当に涙なくして読めないような作品構成になっています。

それから、「ネオ・ファウスト」。手塚治虫さんは非常にファウストフリークです。ゲーテの書いた「ファウスト」です。自分流に「ファウスト」を「ネオ・ファウスト」としてお描きになっている作品です。こちらは大学の教授が主人公です。不老不死というか、若返りを望んでいるということをテーマにした作品です。

それ以外にも、例えば「ミッドナイト」というタクシードライバーが主人公の作品もあります。「七色いんこ」も、非常におもしろい作品です。主人公が役者なので、変幻自在にいろんなものに化けるんです。しかしこの役者は実は大泥棒という設定になっています。ほんとに読めば読むほど、手塚さんの懐の深さ、手塚哲学に感心をさせられます。

もう少しシリアスな話をする、例えば「ブラックジャック」の中に安楽死を取り扱った作品があります。ある寝たきりの母親がいて、ブラックジャックはその娘と息子に「お母さんを助けてください」と依頼され病室に向かいます。お母さんはお母さんで自分がそういう境遇であつたら子供たちに迷惑をかける、だから「安楽死させてください」と、ドクターキリコ、これは安楽死専門の医者ですが、彼に依頼する。ドクターキリコとブラックジャックは病室で鉢合わせします。そこで口論になって、最終的にはブラックジャックがお母さんの手術をして助けます。しかしハッピーエンドでは終わらせていないんです。その後、お母さんがブラックジャックによって治療を受けて、元気になった。娘と息子も喜んで一緒に退院をする。3人で退院をするときに交通事故に遭って3人とも死んでしまうという

結末を用意しているのです。ですから、安楽死については、本当に延命させることが正しいのか、あるいはそこで安楽死を受け入れる方がいいのかということについて、手塚さん自身も答えを出していないのです。

「ブラックジャック」にも、今お話ししました人種差別や身分差別について描かれている作品があります。あと、これを言い出すともう切りがなくなるので、この辺でやめますが、貧困問題、それから正義感。例えば「鉄腕アトム」は正義を扱った作品と思われますが、正義についても、実は絶対的正義や目的的正義を描き分けていらっしゃいます。そういう手塚作品の中に込められた思想や哲学、こういうことを、漫画としてではなく、社会科学として研究対象にできるんじゃないかと思い、私は3年ほど前に近畿経済産業局の当時の小林利典局長をお訪ねしたときに、「実は手塚作品はこんなに社会的なテーマを取り扱ってるんです。これを社会科学として研究対象にすることはできないですか」という話をしたら、小林局長は、「巽さん、それはおもしろい。経産省はクールジャパン戦略で日本のすぐれた漫画アニメ、それから日本食とか、日本の価値観を海外に発信していこう、それを産業にしていこうということに力を入れてますので、そういう意味でもクールジャパン戦略の一環としても、そういう深い話は応援できますよ」ということをおっしゃってくださったんです。

それで私は意を強くしまして、その後、上京しましたときに高市早苗現総務大臣をお訪ねしました。私が経済産業省を担当していたとき通産省時代に彼女は政務次官でいらっしゃいました。それ以来、高市さんとは親しくさせていただき、高市先生をお訪ねしたときに、当時、自民党の政調会長でいらっしゃいましたが、大阪の経産局の小林局長から、手塚作品を社会科学として研究するということに対して賛同してくださったんですという話をしたら、「巽さん、それおもしろいね」とおっしゃっていただいて、「文部科学省にも応援してもらいましょう」と言ってくださいました。文部科学省の高等教育局長と官房長にその場で電話していただいて、「もし今から時間があつたら、巽さんに政調会長の車で文部科学省に行つて話をしてもらうので、それを聞いてくれない？」ということまでおっしゃってくださったんですが、その後、国会日程があつたので、御説明まではできなかったんです。

大阪に戻り、漫画を社会科学する、手塚作品以外にも社会性を帯びた作品がた

くさんあるので、それを社会科学することを進めていきたいと思いますと提案すると、大阪商業大学の谷岡一郎理事長兼学長がすごく賛同してくださって、これまでに社会科学の先生方とかが集まりまして、今日は本学の弦間一雄先生も、お越しいただいてますが、これまで5回か6回ぐらい研究会合を開き、将来にはこれを学会にしていきたいと思いますということを進めようとしています。

もう一つ、手塚さんから派生した話としまして、パソナって御存じですよね、創業者の南部靖之さんという代表がいらっしゃいます。南部さんと私、5年ぐらい前にお昼を御一緒させていただいた際に、何げなく「手塚治虫さんのテーマパークとかあったらおもしろいですね」と申し上げましたら、南部代表が、「巽さん、その話、おもしろいね。今度、兵庫県の井戸敏三知事に会うんだけど、それ話してもいいですか」と念を押されまして、「いいですよ、どうぞどうぞ」と申し上げましたら、南部さんから井戸知事にお話をさせていただきました。

そうすると、井戸知事が大乗り気になられて、ぜひそれは進めたいということになりました。パソナは淡路島で農業をやっていらっしゃいます。農地を買って、そこに若い人たちに全国から来てもらって、就職ではなくて就農、農業で生計を立ててもらおうという取り組みをやっていらっしゃいます。だから、淡路島には大変知見がありでいらっしゃって、淡路島のどこかにそれをつくろうということになりました。

3年前に井戸知事が決断されて、県立淡路島公園、つまり県の土地を提供する。だからそこにつくってくださいということになりました。ただ、県有地をテーマパークにするのであれば随意契約ができないんです。ですから、県としては、それはコンペ方式にしようとなり、南部さんの漫画テーマパークのプランが晴れて採択されたというのが、たしか3年前の秋です。これ、私、自分で仕掛けて何なんです、産経新聞の朝刊の一面トップで書きました。

その話が十分進んでまいりまして、これが一番最新の企画書ですが、ウェアラブル端末を使って手塚治虫さんの「火の鳥」は13巻ぐらいあるんですが、それを映像で再現しようというプランが大体でき上がってきました。第1期として、来年の7月に開園をする。場所は淡路島、高速道路を渡るとハイウェイオアシスがあります。ハイウェイオアシスも実は兵庫県の県立淡路島公園の一角になってますので、そこからずっと続く県立公園、ハイウェイオアシスから歩

いていける、そういうところを想定しています。

ベンチャーという意味合いで言うと、実は南部さんが創業された、パソナはベンチャー企業です。かつては南部さんと、それからソフトバンクの孫さん、H.I.S.の澤田さん、この3人が日本のベンチャー三銃士と言われて、大きく取り扱われました。ですから、そういう意味では、オーナー経営者というのは御自身のひらめき、これはいける、これはやる価値があると思われたら、それで進められるというような、そういうメリットというかご決断があるのかなと思います。

葛西さんの話に戻りますと、温かい心を育てる運動というのは1970年から小児科医の内藤寿七郎先生と手塚治虫先生、葛西さん以外は皆さんお亡くなりになりましたけれど、一緒に始めています。どういう運動かという、幼いころに温かい心を育むことがその子供の一生に何よりも大切であり、赤ちゃんの幸せを考えることは人間の幸せに通じる、そういうことを提唱する社会運動です。

原点は、さっき葛西さんが非行とか犯罪者の更生にかかわられる、それをライフワークにされることになったと紹介しましたが、赤ちゃんは、生まれたときはみんな同じ顔をしている。それなのにどうして犯罪者になったり、非行に走ったりする者が出るのだろうかということを疑問に思われたんです。アプリカはベビーカーをつくる会社であるので、そういう根源的なところ、温かい心を育てる、赤ちゃんの幸せを何よりも考えるということを、日本を代表する漫画家である手塚さんと、日本を代表する小児科医であられた内藤先生と、その3人で始められた。赤ちゃんの健やかな成育を願って、それと真摯に向き合った。

それは、実は産経新聞ともかかわりがありまして、「赤ちゃん学」の講座というのを一時期、私ども産経新聞がやっていました。これは葛西さんのところ、アプリカさんがスポンサー等をやっていただいて、産経新聞で連載をしたこともありました。

やっぱりいいことは広がっていくものです。アート引越センター、さっき私の著書で御紹介いただきましたが、アートコーポレーションの専務の村田さんという方が別会社をやっていらっしゃって、アートチャイルドケアという保育事業を手がけておられます。この保育事業では子供の成育とか発達を医学的に検証しようとお考えになっていらっしゃる。7～8年前に赤ちゃん学の権威の小西行郎先生、当時の東京女子医大の小児科医であられた小西先生を紹介してくれないかと

いうことを村田専務から御要請いただきました。そして小西先生を御紹介したんです。そうすると、小西先生の御研究をアートチャイルドケアがサポートする、そういうことを続けてこられて、昨年に今までやってきた調査結果、調査の集大成をシンポジウムの形で皆さんに紹介したい、産経新聞と一緒にやってもらえませんかということになって、去年の12月にグランフロントでシンポジウムを行いました。これは、赤ちゃんの睡眠がテーマになっていまして、赤ちゃんが子供のころに必要な睡眠をとることができなければ、将来にわたって成育に影響が出るのではないかという仮説を、いろんな事例を紹介されながら検証される、そういうシンポジウムでした。これに女優の紺野美沙子さんと呼んでくれませんかという御要請があったので、紺野さんをお願いしましたら、ちょうど日程があいておられたので、快く来ていただき、紺野さんはお母さんの立場、それと一般人の立場ということでお話をしていただいて、好評でした。

手塚治虫さんを中心にいろいろお話を申し上げてまいりました。これまで私は、いろんな中小企業の経営者の方々にもお会いして、取材をさせていただきました。その中でやっぱり印象に残っているというのは、ただもうけるだけじゃない、もちろん企業ですからもうけることは必要、大前提なんですけど、それだけではなく、経営者の理念、信念、それを実現する、そういう経営者は非常に立派であると思っています。

その意味で言うと、「専業主婦だから気づいたたおやかな経営」というのは、去年の12月に私が書かせていただいた本ですが、この書の主人公である藤本加代子さんは珍しいご経歴の女性経営者です。フジモトゆめグループという会社をおつくりになられた。この人の半生を書いてくれませんかということを関西経済同友会の前事務局長の萩尾千里さんから依頼をされて、早速取材にとりかかったのですが、話を聞いてみると非常におもしろい。

彼女は少女時代に、おばあちゃんと一緒に暮らしておられましたが、祖母が寝たきりになってしまっていて、何とか自分が、高校生のころに助けてあげられないだろうかと思っていたんですが、あるときお風呂に入れてあげようと思うんです。浴槽に湯を張って、おばあちゃんを抱きかかえてお風呂に入れてあげようとするのと、「もう怖いからやめてやめて」と言われた。そのことをずっと心残りとして胸に抱いておられた。

大学を出て結婚されるんですが、結婚相手が三和銀行（現三菱東京UFJ銀行）にお勤めになっていらっしゃった。旦那さんが自分より2期上の先輩でした。実は、この藤本さんも、そのご主人も、私も住吉高校でみんな同窓になるというのは後からわかったんですが。三和銀行だと、やっぱり銀行員は転勤があるじゃないですか。彼女は薬剤師で、自分の御友人は薬剤師がたくさん大阪におられて、転勤のない生活を彼女は希望していらっしゃったんです。御主人に、転勤は嫌だから、「あなた医者になって」と言っていたんです。すると御主人は、あるとき彼女と一緒に旭屋書店に行って、医学部の赤本をばらばら見て、「こんな簡単に解けるぞ」と。「もし、どこの医学部でもいいんだったら、来年の春にはどこかに潜り込む」。御主人は阪大の工学部ご出身だったんですが、「阪大だったら1年間猶予をくれ」という話に発展し、1年の猶予の後に阪大医学部に再入学されます。学生になると収入がなくなってしまうので、塾をつくろうと起業されるわけです。

それは「高等進学塾」といって今もありますが、難関の大学を専門に指導する、そういう塾です。高等進学塾をおつくりになられて、そこに偏差値の高い生徒たちがいっぱい集まって、500人ぐらい集まり、それで一財産できちゃったんです。大学を卒業されてから眼科医院を開業され、針中野にフジモト眼科という眼科医院があるんですが、それを開業されて、順風満帆でした。しかし、44歳のときに御主人はがんで亡くなってしまう。彼女は今まで専業主婦だったんですが、その跡を継がなければいけなくなった。最初は、経営って何をやっていいのか全くわからない。でもそこからいろいろ模索をする中で、次第に経営のコツをつかまれるんです。眼科医院は、自分は医者じゃないので医者を雇って経営に携わります。塾のほうも、最初は生徒が減っていきますが、それを何とか立て直されて、経営を安定させた。さっき申しました、高齢者の人を何とか楽に入浴させたり、居心地のいい場ができないだろうかと強く思われ、特別養護老人ホームをおつくりになられたり、福祉ビジネスに乗り出されます。今、従業員数が650人のグループにされていらっしゃいますけれど、その半生を書かせていただいたのがこの本です。

もう時間が参りました。ただもうけるだけではなくて理念、信念、それをもって事業化を進める、私の30年以上の取材経験からそういう経営者は東京よりも意外に関西に多いと認識をしております。特に、きょうの講演のタイトルにさせていただきましたアップリカの葛西さん、葛西さんのお話は、私が今までに取材を

した中で、多分もう最大級の、これを超える話はないのではないかとと思われるほど、非常にエピソードに満ちた、大変、有益な出会いであったかなと思っております。

取りとめのない話、「鉄腕アトム」に絡めまして脱線したり、いろんなことを申し上げましたが、とりあえず、きょう、私が準備させていただきましたお話はこれで一旦終わらせていただきたいと思います。どうも御清聴いただきましてありがとうございます。